

ひまわりからの

メッセーじ

26号

2013.5.14.

西濃圏域
発達障がい支援センター
ひまわり

発行人: 中野たみ子

からす

鳥は何故啼くの？

——歌にこめられた思い——



先日、からすが大量に死んでいるのが見つかったという
ニュースに、なぜか遠い昔に流行した「セツの子」の替
え歌を思い出しました。

皆さんは「セツの子」という童謡はご存知でしょうか？

からす 何故なくの からすは山に

可愛いセツの子があるからよ

可愛い 可愛いと からすはなくの

可愛い 可愛いと なくんだよ

山の古巣に 行ってみてごらん

丸い目をした いい子だよ

その歌の替え歌は、「からすなぜ啼くの からす

の勝ちではー」というものでした。

からすがギャーギャー啼く声は気味が悪いと言われ
ますが、私は、夕方になって巣に帰っていく鳥のカーカ
ーという声にホッとした気持ちになります。「セツの子」
の作詞者である野口雨情は、この作品に親が子と思っ
う心をこめたのではないかと気がします。

けれど「からすの勝ちではー」と歌われた頃から少
しずつ世の中が変わってきて、自分の尺度で物事をは
かって、周りも思いやる心が失せてきているのではないで
しょうか。子どものいたずらに対しても「何でそんなことを
するの!!」「何度言うたらわかるの!!」と叱りつける前に
「くしかったんだよね」「ちょっと失敗しちゃったね」など
と、気持ちにそったことばかけができたなら、親子関係も
少しちがったものになるのではないだろうか。そうすれば
その後の戒めがもっと心にひびくようになるのではないか
と思います。相手が「私の勝ちではー」と言い合ってい
ては、いつまでたっても平行線のままですね。
言うことをきかせるために物を与え、物でつっても決し
て、豊かな心は育たないと思っております。

大人として



ゆずっていいこと

ゆずれないこと

講演も依頼されて出かけることが多くなりましたが、講演後の質問に答えるとき、時々迷います。実際にお子さんを見ていないので、自分が質問されたことに對して、お子さんの実態に即しているのかどうか、心配になるからです。

昨日も、ある保育園の先生から、「二歳で数字を読み時計も大好きでカレンダーを置いておけば集団の中にいるのですが、そういうものがないと皆の中にはいられません。今度三歳児クラスになるのですが、好きなようにさせていいのでしょうか。家でも、ショッピングセンターへ行くと親の手をふりきって走って行ってしまいうので、お母さんは困っているのですが、手をつなぐと大泣きするので、手をつなげないそうです。」と聞かれました。

「二歳で数字を読んだということですから、知的障がいのお子さんではないでしょうが、興味の限局がありますから自

閉症スペクトラムの可能性もあります。指示は通らないようですから、視覚支援も必要かもしれません。そして自分の要求だけで行動していくようですから、少しずつ待つことも、買物に行った時に事故に遭わないように手をつなぐことも教えていかねばならないでしょう。子ども自身の「つもり」と大人の意図とのギャップを知って、自分の気持ちに折り合いをつけていくスタートは二歳位からですから、何でも全て子どもの要求通りに事が運んでいくのでは、将来困るのは本人であろうと考えるわけです。命の危険もありますから、道を歩く時、ショッピングセンターでは「手をつなぎます」ということは、小さい時から教えていきたいことです。そして、数字がわかる子なので、数字を利用して次の行動の予測や場面の切りかえなど、見通しがもてるようにしていくことも可能でしょう。」

この様な答え方をしても、例えば「お母さんは本人の気持ち優先させたいと思ってるので……」とか「大泣きするので、キッと大変なのです……」とか言われると、私はその親子さんを知らないだけに、具体的な方法ま

ではアドバイスできないわけですから、せいぜい言えることは、

「その子が勝手にとび出して命の危険ということも当然あります。小さいから……いつかわかるから……」と思っていると、本当は、誤学習させてしまっていて、大きくならずに従ってお子さんの行動もますますエスカレートしていつ自分の思い通りにならないことに対して破壊的な行動もおこすようになるかもしれません。手をつなぐというルールは、お子さんの命を守ることに同時に、世の中には従わなければいけないこともあるのだという認識にもつながっているんですよ。くらいのことでしょう。

けれど、本当にその親子を知らないのも、果たしてそれで良かったのか……。アドバイスしたことが実行できるかどうか不明ですから、こんなことで良いのかなあと考えてしまうわけです。

ただ、質問者である保育園の先生には、命の危険ということを親さんに伝えてもらうこと、そして、その子の好きなことだけをさせておくのではなく、その気持ちは理解しつつも大人の意図に従うということも少しずつ（例えば「時計の長い針が5まで」）教えていったほうがいいと伝えま

した。

幼児をもつお母さんたちの中には、「親として決めるべきこと」と、「子どもに決めさせること」の区別がつかないで「子どもが嫌がっているの……」「子どもがうしろさういふので……」と、全ても子どもの意思決定に任せてしまふ人もいます。本当にそれでいいでしょうか。「大きくならなうわかります」とアドバイスして下するやさしい方もあるようですが、自分のお子さんの特性を知らずに、お子さんの意思決定に任せていると、「ボクのやりたいようにやっていいんだ」と学習してしまいます。

幼児期に、その様に育った子が小学校で適応していけるでしょうか？、中学校ではどうなるのでしょうか？、

この様に書くと、「じゃあ、厳しくすればいいのですかね？」と極端な判断に走ってしまわれては、それはそれで困ります。

四国にあるトモニ療育センターに伺った時のこと、小学生の男の子が、私たち見学者の前で大声をあげ始めました。見学者である私たちは、いづれも長

年にわたって療育にたずさわってきた者でした。突然のこととびっくりしましたが、すぐに分かりました。彼は私たちがいることで例外を作らせようとしたのです。それがわかったのに、彼の術中にはまることはできません。私たちは知らん顔をして、言外に「あなたがどんなに大声を出しても、私たちは取り合いませんよ。あなたは、ここにきてやるべきことをやらなければならぬのですから……」という姿勢をとりました。彼の声はしばらくは、エスカレーターしていましたが、そのうちにあきうめて机に向かいました。

子どもは、とても賢いなあと思います。トモ三療育センターで見た男の子のような子は、実はたくさんいるのです。自分かどの様にすれば、大人がオロオロするか知っています。そしてそれは、すでに幼児の時から始まっているのです。

泣く、大声を出す、叩く、ひっくり返って暴れるというようなことを試してみても、大人があわてて自分の思い通りになってくれるかどうか、やっ



てみるわけです。そのやり方が成功すると、子どもは次にもそうしてみるわけです。

大人が、このままではダメだと考えて方針を変えようものなら、子どもは以前にも増して大声を出したり、暴れたり……結局は、虐待だと思われるのが嫌だし、子どもの要求を通してあげれば平和だし……というところに着ちつくのでしよう。

ここで言いたいことは、何でも大人の言う通りに子どもを従わせるということではありません。しかし大切なことは、将来起きるかもしれない問題行動を見越して、最初から社会に受け入れられる行動がとれるようにしつけていくということです。小さい時にできなかつたことは、大きくなった後、もっと困難になってくるといふことを知っておくことだろうと思います。

子どもたちにとって何が大切なことなのか、今、もう一度考えてみませんか？

幼児期から基本的な生活の確立をはかっていることそして、少しずつ自分の気持ちに折り合いがつけられる

ようにしていくこと、大切なことではないでしょうか。

「もしたり〇〇を買ってあげるから……」と、すぐにかけ引きをしてしまうのも考えものです。本当に大切なこと、やらなければならぬことは、ご機嫌をとってやってもらうものではないのですから……。

小学生の子であれば、子どもと約束をしてみましよう。そして「自分で決めたことだから守る」という力を付けていきたいものです。ゲームは、お母さんに叱られるからやめるのではなく、時間を決めて自分でやめられるような力が必要です。

家庭の中での王子様や王女様は、いつまでも通用しません。目の中に入れても痛くない程のかわいいお子さんでしようが、「これだけは、あなたがどんなに暴れてもゆずれないよ」という一線があるのかどうか……もう一度考えてみましよう。子どもたちが社会で生きていくのかどうかの鍵をにぎっているのは、まず家庭だと考えて生活を見直してみても下さね。



話す力・

聞く力

小学生の子どもたちの検査を依頼されて、実施していると、色々なことにぶつかります。

その一つは語いの少なさ、表現する力の弱さです。幼児ながらともかく、答は一言、単語で答える子かとても多いのです。普段の会話でも、そうではありませんか？、スマイルブックの引きつぎ会でも、「困った時に自分から表現できますか？」と聞くと、園の先生方は、顔の表情で読みとります。「何となくもじもじしているので……」と答えられる方がかなりいらっしゃいました。語いを豊富にするには、家庭でのおしゃべりや、本を読むことなど、日頃の生活の中にヒントが詰まっていると思ふのですが……。家庭の中でのお子さんとのことばのやりとりも見直してみましよう。お子さんのことばに、もう一言つけ加えてことばを返すだけでも、耳から入ってくることばの刺激になるのではないのでしょうか？、語い数の少



なす、表現力の弱さは、お友だちとのトラブルも引きおこします。乱暴な子だと思われる子の中には、「ことばでうまく伝えられない」「子が多いのです。その子を叱ってみてもはじまりません。どのように言えばよかったかを教えるのが先決です。」

もう一つは、聞き違いや聞き直しが多いことです。

一対一でかわかっていても、注意喚起しておかないと、聞きのがして、「今、何て言った？」と聞き返す子が多いのです。一瞬にして消えてしまうことばも、どうしたらうながし止め、記憶しておけるのでしょうか？ 幼児であればカード遊びも利用してみることでできるでしょうし、低学年であれば、ことばのまねっこ遊びもできるかもしれません。用事を頼む時には、「今から二つ言うよ」と前おきして伝え、「今、何て言った？」と再度答えさせてみるということも、必要かもしれません。

子どもと話していると、大人のことばにいちいち口をはさむ子がいいます。「腹が立つって、どうやって立つの？」「風邪をもううって、どうやってもううの？」「時間がたつってどうたつの？」等々。そういえば、「たつ」にも

立つ、経つ、起つ、発つ、建つ、断つ、絶つ、裁つなど、同音異語はいっぱいありますし、同じことばでも、場面によつては違う意味になったりします。まさに、ことばは生きものです。子どもたちの聞きちがいを「違うのでは？」と叱るだけでなく、「ああ、こんな意味に受け取ったんだね」「そういうふうに関心えたんだね」と受け止めてあげることも大事でしょう。そして、子ども流の解釈を「へりくつ」と思わずに「なるほどね」と考えるだけの余裕があるといいかなあと思ったりします。

一対一のかかわりの中でも聞きまちがったり聞きのがしたりする子は、おそろく集団の中ではもっと聞くことができないでしょう。必要なことを選び出して聞く力は、まず一対一で、そしてグループで、雑音の中から必要なことばを取り出して聞くための教材づくりは、発達通級の先生方が担って下さると思います。

お知らせ

・センター親の会例会 五月十四日 九時半～
“生きる力、生活力を考える”